祈る皇女 斎王のみやこ斎宮 日本遺産

さいくうあと通信

発行：明和町　斎宮跡・文化観光課　（三重県多気郡明和町大字斎宮2811）
電話：0596-63-5315　E-mail：saikuuato@town.mie-meiwa.lg.jp

＜国指定天然記念物「斎宮のハナショウブ群落」＞

国指定天然記念物「斎宮のハナショウブ群落」は昭和11年（1936）に指定され、今年で90年を迎えます。この間、地球環境の変化や周辺の環境の変化により群落の維持が厳しい状況ですが、町の花であるノハナショウブの維持管理につとめています。

今回は新たに発見した関係資料をご紹介したいと思います。資料は、指定後の昭和12年に当時の斎宮村の村長であった乾覚郎が群落の由緒について撰文し、掛け軸にしたものです。

往昔　景行天皇の御代　皇大神の御杖代として　大神の御前に　斎きまつり給りたる　皇女　久須姫命より　後醍醐天皇の御代　皇女　祥子内親王に至らせ給ふまで代々の皇女の宮居在ましける　斎宮寮の花園に生ひ茂れる花菖蒲（とんと花）を宮人達の愛でさせたまひつるは古韻のかすゝにても知られけり其の中に

頼もしな　のの宮人の植うる花　時雨るる月に　あすはなるとも　源　順

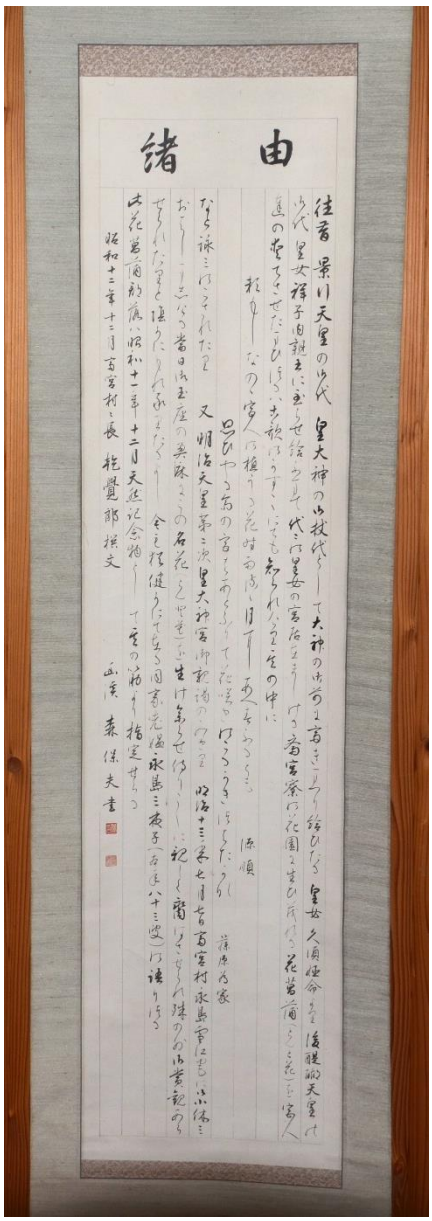
思ひやる　斎の宮は跡ふりて　花咲のこる　かきつばたかな　藤原　為家

など詠みのこされたり　又　明治天皇　第二次皇大神宮御親謁の砌　明治十三年七月七日　斎宮村永島雪江宅に御小休みおはしましける　当日御玉座の奥床に此名花（とんと花）を生け参らせ侍りしに　親しく□はさせられ　殊の外御賞観あらせられたりと陰かに漏れ承りたる由今も猶ほ健やかに在る　同家老媼（本年　八十三叟）の語りつる

此花菖蒲群落は昭和十一年十二月天然記念物として其の筋より指定せらる

昭和十二年十二月　斎宮村々長　乾覚郎　撰文　画渓　森保夫　書

箱書きには「どんど花由緒」と記されている



乾　覚郎（２代目）

資料には明治天皇が永島家でノハナショウブを鑑賞したようすが克明に記されており、指定の経過の一端を知ることができる貴重なものです。掛け軸の撰文は指定文化財となった翌年で、当時の盛り上がりが感じられます。

明治天皇・皇太后が鑑賞された「どんど花」

斎宮村の永島家には明治２年（1869）と明治13年（1880）に天皇が、明治20年（1887）に**英照皇太后が**休憩を取られ、行幸啓の際にどんど花（ノハナショウブ）を鑑賞された記録が残されています。

永島雪江

＜明治天皇＞

雪江の家は明治二年神宮御参拝の砌にも晝の御休所に充てさせられしが、今再び此の光栄を重ねたるなり。玉座の邊りに土地の名花勝見花を挿みしに、畏くも叡覧に入りて御意斜ならざりしとぞ。勝見花は燕子花に似て、晩春より初夏にかけ、紫の美花を開く。俚俗に「どんど花」と称し、往昔斎宮寮の在せし時、花園に植えて賞でさせられし種の今の世にまで残りしなりと言い伝えたり。**『御巡幸紀要』より**

＜皇太后＞

光栄の「どんど花」

（前略）多気郡斎宮村長より献納方願出でた花菖蒲「どんど花」の一鉢は、台覧の後、特に御嘉納の光栄に浴した。花菖蒲「どんど花」は明治十三年七月七日、畏くも明治天皇御二次神宮御親謁の御砌、同村永島雪江宅に御少憩あらせられし際、玉座の奥床に生け参らせ、殊のほか御清鑑に協ひたる光栄の花である。この花は多気郡斎宮村大字斎宮の蛭の澤・稲葉澤の両沼澤に群生している燕子花の一種で、その昔斎王離宮の御庭に植えさせられたという由緒深きもので、斎王宮廃絶後もこの遺跡の沼澤に咲き残りて千有余年の俤を留め、ゆくりなくも明治天皇天覧御賞観の栄に浴したのであるが、此の花の群落は昭和十一年十二月天然記念物に指定せられ、今回再び台覧の光栄に恵まれたのである。

『皇太后陛下行啓記』より

明治期のこうした皇室との複数回におよぶ関係や、斎王に関わる地元伝承があったことが、昭和11年に指定文化財となった一つの理由だと考えられます。

これからも「どんど花」という地域固有の呼び方も含め、町の花として大切に守り伝えていきたいですね。

永島家に伝わる菊御紋入りの蹲